The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	八丈方言動詞の基礎研究
Author(s)	金田, 章宏
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44422
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名　金田章宏（かねだ あきひろ）

博士の専攻分野の名称　博　士（文　学）

学位記番号　第　17369　号

学位授与年月日　平成14年12月5日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文名　**八丈方言動詞の基礎研究**

論文審査委員　（主査）
教　授　工藤眞由美

（副査）
教　授　真田　信治　　助教授　渋谷　勝己

論文内容の要旨

本論文は、動詞形態論を中心にした、八丈方言の文法体系の記述的研究である。八丈方言の全体像を概説した「序章」、動詞の形態論を詳述した「本論」、民話、民謡、談話テキストを収めた「資料編」よりなる。

序章の「八丈方言概説」では、まず明治期以来の研究史について述べ、次に第1節「音韻論」では、地区ごとの音韻対応表を整理し、第2節「形態論」では、名詞（代名詞）、動詞、形容詞ごとにその形態論的特徴を記述し、第3節「構文論」では、八丈方言に特徴的な強調構文と疑問構文（いわゆる係り結び）および、格の二重構文について述べる。

本論である「動詞形態論」は全9章で構成されている。第1章「諸形式の成立過程」では、第1節で、主要な語形と派生形式の成立過程を、古代語との音韻対応などを踏まえて分析し、第2節「否定動詞の成立過程」で、先行研究では注目されなかったノミンジャララがノミニシアリアロワに由来するのではないかとの考えを提起し、奈良時代の中央語そのものでも出自を確定できない否定の「ズ」が、否定の要素「ニ」とサ変動詞「ス」から成立したという証拠を方言の側から提示できる可能性があることを指摘している。第2章「活用のタイプ」では、動詞の活用のタイプの詳細な分類を行い、古代語動詞の活用のタイプとの関連を整理する。第3章「動詞の活用」では、機能・ムード・テンスのカテゴリーに基づく動詞の基本的な活用表を提示する。

第4章「基本的なムード・テンス・アスペクト」と第5章「特殊なムード・テンス・アスペクト語形」は、本論文の中心的な部分である。第4章第1節では、ムードの構造分析を行い、「コソ」と「カ」の係り結びや上代東国方言の推量「ナム」を保存している状況を具体的に示す。第2節では、テンス・アスペクト体系の分析を行い、助動詞「キ」の存在や基本形が「現在進行」を表す点で、きわめて古代語に近いものであることを明らかにし、第5章第1節と第2節で、具体的分析を行っている。第3節と第4節では、いわゆる連用形が終止用法をもっていて感嘆文述語として使用されること、感情・感覚を表す動詞と形容詞とが、語彙的にも文法的にも1つのグループを形成していることを述べる。第5節では、存在の「ヲリ」とこれを補助動詞化した「テヲリ」をもつ語形の意味用法を取り上げ、古代語同様、存在の意味が「アリ」と「ヲリ」によってあらわされていたことを指摘する。

第6章では、ヴォイスについての記述、第7章では、中止形、副動詞、条件形と譲歩形、連体＝名詞形、接続形の記述を行い、特に、古代語的な条件形の用法がかなりの程度に残っていることを示している。第8章「待遇表現とやりもらい」では、特に、絶対敬語的な用法、ていねい表現の未発達、目上に対する命令形の使用などの点に、八丈方言の古相が示されると述べる。第9章「文法的な派生形式のいろいろ」では、局面動詞、もくろみ動詞、派生形容詞

などを取り上げている。

論文審査の結果の要旨

八丈方言は、日本語研究にとって、琉球方言とならぶ重要な方言とみなされ、明治期以来、特に、上代東国方言との関連で注目を集めてきたが、従来の研究で明らかにされたのは、文法現象の重要ではあるが特徴的な断片にすぎず、その全体像および詳細な実態については不明な点が多かった。本論文は、言語学的方法論に基づいて、先行研究で指摘されていた文法現象の諸断片を、新たに確認した多くの語形や派生形式とともに体系的に位置づけ、歴史的な視点も考慮しつつ、動詞を中心とする文法体系を記述したものとして、画期的なものである。八丈方言は、日本語諸方言のなかで最も消滅の危機に瀕しており、将来これほどまでに詳細な記述は不可能であることからも、本論文の価値は高い。

八丈方言を一つの言語体系として提示した本論文ができあがる背景には、よそ者としてのいわゆる方言調査らしきものを行わず、十数年にわたって生活をともにしてきた島の人々との信頼関係と、消滅寸前の島ことばの生きた姿をできる限りうつしとることによって、もはや理解が不可能になっている若い世代の人々が継承できるようなテキストを作成したいという情熱がある。この意味でも、本論文は今後の言語研究のモデルとなるものである。

本論文で記述されている、いわゆる係り結びや「メノマエ性」は、今後、沖縄諸方言との比較対照や、あるいは古代日本語との関係の精密な分析を経ることによって、日本語研究が世界の言語学に貢献できる重要な文法現象である。先駆的な研究であることから、文法形式の意味・機能の理論的分析の弱さ、従来の文献学的研究の成果が未消化な部分、古代語と一括してしまっている粗さ、形式「キ」を記述しながら「ケリ」の記述が漏れたり、形式「ベイ」の位置づけがはっきりしていない点、「コピュラ」などの用語の説明が不十分な点などが見られるが、これらは本論文の価値を否定するものではない。このような諸問題の解決、修正、補充は、今後、さらに、名詞や形容詞の詳細な体系的記述をめざす著者に期待したい。

よって、本論文を博士（文学）にふさわしい価値を有するものと認定する。